

さぬき市豊田自治会の鳥獣被害対策（集落ぐるみ）

進化する平成のシシ垣

小豆島のシシ垣

香川県小豆島には、全長約120kmに及ぶシシ垣があった。江戸の中期頃から作られたと言われ、土壁と石垣の2種類のシシ垣の一部が現存している。

「小豆島は塩の名産地であり、元禄の初めから塩水を煮詰めるために松林をはじめ雑木林を多量に必要としました。そのため、島の中央の山は入相山として絶えず伐採され、集落に近い山々は禿げ山に等しいような状況であったといわれています。特にそのため、野生動物のイノシシやシカなどの食料は不足し、農作物への被害が発生するのは極めて自然であり、そのため全島にわたって「しし垣」の築造を要したと推測できます」（池田町史より抜粋）。



さぬき市豊田自治会の取り組み

イノシシ、サルの被害

香川県さぬき市大川町豊田自治会は、戸数28戸（うち非農家6戸）の集落で、南側をなだらかな山に囲まれ、水田12.5ha、果樹栽培が行われている。

イノシシ、サルによる被害は平成7,8年頃に集落全域に拡大した。

集落一丸となった被害対策

多くの地域で、集落一丸となった被害対策が行われているが、豊田自治会も非農家を含め集落全体で被害対策を行っている。副代表の有馬さんは“うちが特殊なわけではない。リーダーとなる人や重機操作や電気に詳しい人などはどの集落でもいるはずだ”という。しかし、近隣の自治会は同じような条件ではあるが、被害対策は思うように進んでいない。

では、何故豊田自治会ではうまくいっているのか。

そのヒントの一つが、有馬さん曰く“近隣の集落では、鳥獣被害は行政任せで、自分たちで行おうとしない”。豊田自治会がはじめに行ったのが、平成18年に遊休農地をワイヤーメッシュと電気柵で囲って共同家庭菜園（約20a）を作った、被害防止の実証である。非農家も家庭用の野菜を作っているがサルの被害にあっていたので、実証結果により被害対策の効果と必要性を知ってもらうことができた。



共同家庭菜園 中央奥は山に伸びる緩衝帯

その後、県単事業や国の中山間地域等直接支払制度などを活用して、集落全体をワイヤーメッシュと電気柵で囲う作業がスタートした。

鳥獣ストップゾーン（緩衝帯）の設置

全国各地で緩衝帯の整備がおこなわれている。その中で、豊田自治会の特徴について述べる。緩衝帯は、幅5mから10mである。近隣の集落との境は、樹木の伐採の理解が得られないなど



尾根沿いの緩衝帯



傾斜 45 度の緩衝帯

の理由により幅が狭くなっているが、概ね 10m となっている。伐採した杉や檜は、1 本千円で買い取っている。

一番の特徴は、多くの緩衝帯（多分 7 割くらい）は軽トラックが入れるように道が整備されていることである。これにより、作業者をはじめ草刈り道具や修理資材の搬入などが容易におこなえるので、緩衝帯及びワイヤーメッシュや電柵のメンテナンスが支障なくおこなえる。軽トラックが入らない急斜面は、約 45 度の傾斜地までは重機を入れているので、作業機材の運搬や伐採した樹木の搬送が容易におこなえる。

分担と共同作業



侵入口の補修



緩衝帯のメンテナンスは、場所ごとに担当が決まっている。担当者は、自分の受け持ちエリアの草刈りをおこなっているが、仕事などの関係で必ずしも十分とはいえない。そこで、年 3 回、集落全員で草刈りやワイヤーメッシュや電気柵の補修をおこなっている。この補修作業は有償なので、参加率は良いようだ。手当は、中山間地域等直接支払制度の中から拠出している。この作業は自治会活動の一環としておこなわれているので、自治会員の反発はない。

進化する平成のシシ垣

集落を囲む緩衝帯+ワイヤーメッシュは、完成当初は総延長 7km であったが、現在は 4km となっている。将来は更に短くする計画だ。

普通なら総延長が年ごとに長くなりそうだが、何故短くなっているのか。それは、山あいの田畑と山際をくねくねと整備していった緩衝帯を、山の尾根沿いを一直線で整備することにより緩衝帯の距離を縮めているためだ。距離が短くなることにより、メンテナンスする距離も短くなり、作業量や資材コストを減らすことができる。

利活用

箱わなで捕獲したイノシシは食肉として活用するため、現在保健所に申請中である。今後、地域資源として活用を図るそうだ。

考察

全国各地から視察が絶えないそうだ。集落の体制は、他の地域でも整うことができると思うが、同じような平成のシン垣を作るには、次の要件が必要と感じた。

1 土壌

この地域は真砂土なので水はけがよく、軽トラックが斜面を上り下りしやすい。粘土質土壌は水はけが良くないので、軽トラックがスリップしやすい。石が混じった土では、タイヤの消耗やスリップをおこしやすい。

真砂土なので、重機による整地と軽トラックによる作業がしやすい。

2 急勾配が少ない

おにぎりに似た形状の山なので、比較的なだらかな斜面が多い。このため、尾根に登る道を容易に作れるし、尾根沿いもなだらかな勾配となっている。

3 呑みにケーション

なんといっても集落全員で呑み会う機会があることが一番だそうだ。有馬さんも“昔からの結いの慣習が残っているので、比較的容易にできているのかもしれない”と話していた。

